

滋賀県流域治水検討委員会 第2回住民会議

議 事 要 旨

日時：平成20年5月2日(金) 14:30～17:30

会場：滋賀県庁東館7F 大会議室

出席者：52名（傍聴者含む）

委員 石津文雄、大橋正光、北井香、柴田善秀、杉本良作、中井正子、中村誠伺、
(敬称略) 成宮純一、齒黒恵子、松尾則長

アドバイザー 多々納裕一（京都大学防災研究所教授）

オブザーバー 市町担当者、県関係部局担当者

事務局 県土木交通部技監、流域治水政策室、河港課

議事

1. 開会あいさつ
2. 本日の内容について
3. 座長選出
4. 議事
 - ・事務局説明
 - ・審議
5. 一般傍聴者からのご意見
6. 閉会



議事要旨

1. 開会あいさつ

事務局より、資料確認、注意事項の説明が行なわれました。

また、4月の人事異動を受け、事務局担当者の紹介が行なわれました。

引き続き、清水重郎滋賀県土木交通部技監より開会のあいさつがありました。

2. 本日の内容について

事務局より、住民会議の次第および審議内容について説明がありました。

3. 座長選出

委員の中から、今後の議事進行を行っていただく座長を選出しました。

委員より、まず3名を推薦し、その3名の中で投票を行う方法の提案があり、結果、大橋委員が座長として選出されました。



4. 議事

(1) 座長職務代理者の選出

- ・ 座長より、杉本委員を職務代理者として指名され、了承されました。

(2) 事務局説明

- ・ 事務局より、資料3を用いて地域防災力アンケートの結果についての説明がありました。また、内閣府が公表している「地域防災力の診断」システムを用いた水害に関する地域防災力評価についても紹介がありました。
- ・ また、資料2を用いて「リスク情報の共有化」、「リスクコミュニケーション」および「コミュニティを取り戻す仕組みづくり」をテーマに、地域防災力の再生の事例紹介が行なわれました。



(3) 審議

- ・ 北井委員から、県内7箇所の4つの自助・共助の取り組み事例として、「大きな被害があったことを残して残っている活動事例(野洲川・大戸川)」、「災害体験者が、「ここは今も危険だ」という視点で実施している活動事例(高時川・日野川)」、「川に関する全般的な学習をしている活動事例(知内川・百瀬川、安曇川)」、「川に関する団体が取り組んでいる活動事例(千丈川)」の紹介と課題提起がありました。



- ・ その後、事務局説明および北井委員の報告を参考に、地域防災力の再生に向けてどうすべきかについて、発言していただきました。各委員の意見要旨は以下のとおりです。



【中村委員】

- ・ 自分が住んでいる団地では自主防災組織がなく、避難訓練を行ったこともない。自主防災組織は、どういった単位でつくられているのか。
- ・ 水害について先人に学び、後世に伝えるためには、まず組織づくりが必要だと思う。

【事務局】

- ・ 自治会単位でつくられていることが多いようです。アンケート結果でも、自主防災組織長 = 自治会長となっています。
- ・ オフィシャルには、自主防災組織の組織率は、(自主防災組織に参加している世帯数 / 全世帯数) ですが、アンケートでは自主防災組織数を基にしています。



【中村委員】

- ・ 避難所の設定や備蓄、消防団との連携等を考えると、自主防災組織の単位としては、自治会単位より学区単位ぐらいの範囲の方がやりやすいのではないかと。

【事務局】

- ・ ネットワークの構築はこれからの課題であると思います。
- ・ アンケート結果からは、自治会が自主防災組織を兼ねている事が伺われます。
- ・ 大津市の私の住んでいるところでは、1学区に12の自治会があり、1学区に一つの消防団があります。
- ・ 要援護者対策などを考えると自治会単位ぐらいが適当であると思います。



【松尾委員】

- ・ 事務局説明にあったアンケートによると、彦根市では、自主防災組織の組織率が39%となっており、各設問への回答を見ると非常にいい回答がなされているが、自分の実感と合わない。水害への関心はもっと薄いように感じる。
- ・ 災害について“知る・学ぶ”活動がいちばん大事だと思う。
- ・ また、普段からの近所付き合いにより“絆(きずな)”を深めることも大事。
- ・ “河川整備の計画を検証”し、防災を考えていくことが必要。
- ・ 平常時の活動と災害時の活動は全く違うことを理解しておく必要がある。
- ・ 行政から、災害に関するいろいろな情報が流されているが、使い方が伝わっていない。(携帯などの使い方も教えてほしい)。使い方も伝えることが大事。



【大橋座長】

- ・ アンケート調査結果については同感(実感と合わない)。
- ・ 行政から自主防災組織を作ってほしいとの要望があるため作るが、その年の自治会長の熱意によって活動が途切れたりすることが課題。



【杉本委員】

- ・ アンケートは地域の傾向を表しており、参考になる部分も多いと思う。避難誘導力が29点といったところは、若い人が少ないという地域の年齢構成が良く出ている。
- ・ 地域の防災活動に配慮した就業管理など、企業や団体、組織などに協力と理解を求めていく

ことも重要だと思う。

- ・ 携帯電話で現場撮影を行い河川管理者に送信するなど、新しいシステムも取り入れながら防災訓練を行ってみてはどうか。



【石津委員】

- ・ 水防活動なども、出勤中では帰りにくいので、団員のいる企業については、行政の方からも協力要請などを行ってほしい。
- ・ 安曇川の下流では、集落同士で防災協定を結んでいるが、集落によっては若い人が少ないといった課題もある。



【中井委員】

- ・ 水害が起きる可能性を認識すること、どんな危険があるのかを知ることが大切だと思う。
- ・ D I G (白地図を用いた災害訓練)の実施等により、災害時の対応や自分の地域の危険度を知ること重要。
- ・ 川をフィールドにした景観調査や地図づくりなどの活動の中に、防災という視点も取り入れてはどうか。



【成宮委員】

- ・ 財政難を理由に公助をあきらめているように感じる。行政だけでは完璧に守れないというだけでなく、ここまでは対応可能という説明も必要だと思う。
- ・ 防災会議では、ジャッキやチェーンソーなど設備を整えることばかり考えている。何もなくても防災活動はできるのではないか。
- ・ 新興住宅地や都市型の生活を行っているところでは、防災に対する意識が薄いため、行政からソフト対策についてもしっかり説明する必要があると思う。出前講座なども考えてみてはどうか。



【多々納アドバイザー】

- ・ リスクコミュニケーションの目的には、「C A U S E 1」がある。
- ・ これまでの議論は、主に「S・E」に関する事だと思いながら聞いていたが、研究の中でよく議論になるのは、「A = 気づきが足りない」ということで、それに対する方策も考えないといけない。
- ・ 大阪大学の渥美先生は、“防災と言わない防災”という言葉が使われている。例えば携帯で現場写真を送る訓練は、写真コンテストにしてみてもいいということ。
- ・ 「防災を楽しもう！」という観点があってもよい。一所懸命な活動を褒めるとか、発表の場を設けるとか、表彰を行うなど、「楽しむ」議論もできるといい。

1: CAUSEとは、「C: クレディビリティ(信頼) A: アウェアネス(気づき)、U: アンダースタンディング(理解)、S: ストラテジー(取り組み)、E: エンアクトメント(方策)」の頭文字



【大橋座長】

- ・ 私の場合、勝手口に長靴や電池やヘルメットといった最小限の物を置いていて、いざというときにはすぐ持って出ることができるようにしている。
- ・ 新興住宅の人たちとどうコミュニケーションをとっていくのかということも課題である。



【松尾委員】

- ・ 自分が参加している環境フォーラムでは、活動を継続させるため、頑張らないで気楽にやっている。
- ・ 地域の様々な行事に防災を交えることも有効では。
- ・ 先進的な防災活動をしている地域との交流を深めることも必要だと思う。
- ・ 日常のボランティア活動では、事務局の設置や資金面などに限界があるので、行政の支援も含めた検討を行う必要がある。
- ・ 表彰などを行うと、やりがいを感じることができると思う。



【中村委員】

- ・ 自分の住む地域では、消防訓練だけでは人が集まらない（役員しか参加しない）ので、県下一斉清掃が終わった後に消防訓練を行っている。活動を定着させるには、地域の連携を深めるとともに、皆が集まるところで行なうことが大切。
- ・ 滋賀県は、大阪や京都への出勤者が多い。祇園祭などは地元企業が参加しているが、地元企業に自主防災組織へ参加してもらってはどうか。
- ・ 新興団地などでは、組織を作って参加してもらうことが必要だと思う。



【齒黒委員】

- ・ 水環境をテーマにしたイベントなどでは、子どもだけでなく親や祖父母など多様な年齢層の方が集まるので、このような機会を利用して、災害を伝えていければよいのではないかなと思う。
- ・ まず、今の川の様子や地域の様子を知ることが重要。



【成宮委員】

- ・ 愛知川には、災害への安全祈願のお宮があり、地域の法人からも住人として寄付金を募っている。
- ・ ほとんどの方がサラリーマン化しており、防災会議を自治会でやろうとした時に、行政任せの意見が多い。
- ・ 本来、防災も地域の文化ではないかなと思うが、こうしたことをするきっかけがなくなってきたと思う。自助を促すための公助があってほしい。



【中井委員】

- ・ 阪神大震災の経験も踏まえ、企業の労働力を防災にも使うことを考えてみてもいいと思う。水害の時は交通マヒも考えられ、なかなか動くことができない。
- ・ 郷里の福知山では“堤防祭り”を実施し、浸水被害を思い出すきっかけとしている。

- ・ 国交省の支援も受けて、古い民家を利用した「治水記念館」を作り、子どもたちの教育施設としている。古い民家は滑車があるなど災害対応ができるようになっており、昔の暮らしや知恵を知ることができるが、家づくりにも防災の視点を入れていく必要がある。



【大橋座長】

- ・ 知事との懇談会の時、30代の女性が、「初めて危険な場所にいることを知った」と言われたことが印象に残っている。若い世代に水害経験や川と地域とのつながりをどのように伝承していくかが課題であると思う。
- ・ 地元（日野川）には浸水の目印になっているお地蔵さんがあって、どこまで水につかったらどの位の危険性があるかといった目安となっている。
- ・ 地域間の交流を深めたり、新興住宅の方々と防災に関するコミュニケーションをとっていくことも重要。
- ・ 地元で洪水を知らせるときに使っている鐘は350年前のものである。地域の川の歴史を楽しみながら勉強していくこともひとつの方策ではないか。

5. 一般傍聴者からのご意見

一般傍聴の方からご意見をいただきました。主なご意見は、以下の通りです。

【男性（彦根市在住）】

- ・ 河川の未改修区間の地図を見たいと、県や土木事務所を訪れたが、無いと言われた。自助・共助を考えていく上で必要な情報が入手できない。情報の共有を進めてもらいたい。
- ・ 岐阜県の事例で、小さい地域で全員が消防団員であるにも関わらず、自主防災組織を作ってほしいとの要望があったという。数字を上げるための自主防災組織が機能するのかが心配。
- ・ 自主防災組織の考え方は、10年前の阪神大震災の時の考え方で、現在とは合っていないのではないか。

【男性（大津市在住）】

- ・ 仰木の里の自治連合会では、毎年11月に自主防災会の訓練を行っているが、歴史、ノウハウ、知識が集約されており、活動が非常にうまくいっている。
- ・ 水防団は、定期的な訓練を行っている消防団が兼ねるべきであると思う。
- ・ 婦人会なども参加して、防災訓練時には炊き出しも行っている。

【途中退席された方の意見（事務局が代読）】

- ・ この会議の目的が不明確であった。自主防災組織の強化についての話し合いか。

【途中退席された方（男性：大津市在住）の意見（事務局が代読）】

各河川を見廻るレンジャーのような人を決めるということではできないか。



【松尾委員】

- ・ 災害はいつ起きるかわからないので、夜の防災訓練も必要では。



【多々納アドバイザーによる総括】

- ・ 企業に自主防災組織に参加してもらうという視点は重要なポイントだと思う。
- ・ 本日は、活動報告にとどまった感がある。次回には、誰が誰に対してどうしていくのかという「道筋」をまとめ、主体と行動を整理していく必要がある。



6. 閉会

滋賀県河港課長から閉会のあいさつがありました。また、事務局から、次回の会議は6月1日とするとの案内がありました。

以上

議事要旨は主な議事の内容を迅速にお知らせするために庶務(滋賀県流域治水政策室)で取りまとめているものです。詳細な議事内容については、議事録を会議後1か月程度で公表する予定です。